うまれかわり

紅葉藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うまれかわり

【Ｎコード】
Ｎ１９０５Ｋ

【作者名】
紅葉藍

【あらすじ】
都会の小学校から突如小さな村の学校に転任してきた秋環里美（あきわりみ）。秋環はその村で起こってしまった悲しい事件を知っていき、自ら真実を探り始めるのだが、その後意外な真実を目の当たりにしてしまう。

プロローグ

暗く静かな森の中、不気味な音な鳴り響く。黒いフード付コートの女が大きなシャベルで、湿った土をすくってはすぐ傍の足元にある穴の中へ放り投げていた。女の表情は血が引いたかのように青ざめており、涙を目に溜めている。ざっざっという音だけが森の中に響き渡り、女が穴を塞いだ途端にシンと静まった。

とても寒い夜だったが、女の顔には汗が滲み出ている。女はその穴が塞がったのを確認すると、慌てて森の中を走り出す。そしてそのときの彼女の表情は、それまでになかった清々しさがあふれ出ていた。

第一章　村の学校

ガタガタと揺れるバスの中、私はぼんやりと外の景色を眺めていた。いつの間にかビルの立ち並んだ町並みは消え、山や草木などの緑に変わる。私はそれを確認すると、本日２０回目のため息をついた。

私は東京から約半日ほどバスに揺られ、自然豊かな場所にあると聞いた小さな村に移された。その村にある小学校に転勤になったのである。別に虫や草が嫌いなわけではないが、生まれ育った東京を離れ、不便な小さな村に突然飛ばされたことがどうも納得できなかった。私が何かしたのだろうか。

そんな苛立った思いを抱きながらバスに揺られ、指定された場所に着いた頃には夕方になっていた。私が大きな足音を立てながらヅカヅカとバスを降りると、迎えに来てくれたのか、スーツを着た３０代前半くらいに見える男が立っていた。真面目そうでキリッとした顔立ちをしており、降りてきた私を無表情で迎える。

「お疲れ様です。秋環里美（あきわりみ）先生でよろしいですね？」

「はい、そうです。わざわざお迎えありがとうございます」

皮肉まじりにそう返すと、男は眉毛を微かに吊り上げた。

「私は後藤想士（ごとうそうし）と申します。道に迷われると困るので、わざわざお迎えさせていただきました」

「それはどうも。じゃあ疲れたんで早く案内していただけますか」

私には皮肉は通用しない。後藤先生は明らかに気分を害した様子で、大股に歩き出した。私に対しての軽い嫌がらせなのであろう。まったく、小さい男である。荷物すら持ってくれない。

大きな荷物を抱えながら、私は早足で後藤先生の後ろについていった。長時間ガタガタと揺れるバスに座っていたため、体が痛くてなかなか上手く歩けない。しかも道が舗装されていないので、余計に体力を消耗してしまう。

私が辛そうな顔をしているのに気づいた後藤先生は、無言で持っていた大きな鞄を私から奪った。軽々と持つその姿は男らしかったのだが、なんだか少し悔しいような気分にもなる。

数分歩いたところで小さな村にしては大きい白壁の建物についた。どうやらそこが学校らしい。しかし小学校にしては少し大きすぎる気もした。

「大きな学校ですね」

「この村の学校は小学校、中学校、高校が一緒なんですよ」

なるほど、それなら納得だ。しかしそう考えると、今度は小さい気もするな。

「生徒は何名くらいいるんですか」

「全校生徒合わせて２００名ほどです」

「へぇ」

この村にしては多いとは思うが、普通の学校よりははるかに少な

い。私はそんなところに飛ばされてしまったのか。なんだかまたため息をついてしまいそうだ。
すでに時計は18時を回っており、辺りは真っ暗になっていた。学校は静かに佇み、職員室らしき部屋だけ明かりがついている。私はふと、通ってきた校門を振り向いた。

「ん？」

校門の前に黒いセーラー服を着た少女が立っていた。少女は揃った前髪に長く黒い後ろ髪で、私をジッと見ていた。大きな目を見開いたまま、白い肌が暗闇の中でもよく見える。私と少女の目があったとき、少女は突然にやりと奇怪な笑みを見せた。その表情が予想していたものとは違い、可愛らしいものではなく、私は恐怖のため小さな悲鳴を上げてしまった。

「どうされましたか」

立ち止まる私に気がついた後藤先生がそう声をかけてきた。

「あの子は・・・・・・」

私の目線を追い、後藤先生は少女を見る。すると少女は可愛らしい笑みを浮かべ、こちらに手を振っていた。そして手を振りながら、ゆっくりとした足取りで校門から出て行く。

「あの子は中学3年2組の神田光（かんだひかり）ですよ。成績優秀のいい子です」

「そ、うですか・・・・・・」

私が見たものは錯覚、そう思うことしかできなかった。しかしい

くら暗がりだからといって、生徒に恐怖を覚え悲鳴まで上げてしまうことなどありえるのか。
校舎内に入り、薄暗い廊下を歩く。私と後藤先生の足音だけが響いた。職員室は一階の校舎入り口のすぐ傍にあり、後藤先生はそのドアを軽く叩いて開ける。

「秋環先生が到着しました」

後藤先生がそういうと、それまでパソコンや書類に目を向けていた先生方は私の方に顔を向ける。その表情はみんな笑顔だった。一番初めに私の方に近づいてきたのは白髪頭の男で、彼は私に笑顔を向けながら話しかけてきた。

「おぉ！よくいらっしゃいました！先生のことをお待ちしておりましたよ」

「それはどうも」

歓迎されているようだが、別に私は嬉しくもない。ここにいる先生たちを見て、私は大きな不安をさっそく心の中に落とされた。
少なすぎるのだ。その場にいた先生は白髪の男と後藤先生を入れて4人。それだけなら、帰ってしまった先生もいるのだろうと思うのだが、職員用の机が5台しかないのである。

「あの、ここの先生は小学生だけのですよね」

苦笑いしながらそう聞いてみると、白髪の男は私よりも苦い顔をしながら首を横に振った。

「いえ、ここにいる先生方と校長先生だけで全校生徒を見ています」

本気で言っているのか、冗談であってほしかった。しかし冗談などあるはずもなく、私は思わず大きなため息をついてしまった。それを見た女の先生が困ったような顔をする。

「そんな大きなため息をつかないでください。大丈夫ですよ！ここの生徒たちはとってもいい子たちばかりですから！私も始めて来たときは凄く驚きましたけど、慣れれば全然・・・・・・」

「慣れれば・・・・・・ですか・・・・・・」

今すぐ帰りたくなった。突然田舎に放り出され、しかもその職場は戦争状態。私は使い捨ての軍人のようである。

「それで、私はどの学年を見ればいいのでしょうか」

「秋環先生は中学生の担任をお願いします」

「・・・・・・はぁ？」

元々小学校の教師であった私にいきなり中学生の担任をやれと、うっかり反抗的な態度で返してしまった。しかしそれはさすがに無茶な命令だと思う。

「あ、あの私、ほんの数日前まで小学生の担任をやっていたのですが」

「えぇ、わかっていますよ。ではお願いします」

いや、わかってねぇだろ。私が一体何をしたというのだ。しかも

中学生は私がもっとも好まない年である。人数不足だというにしても、小学校の教師に回すのが普通だと思うのだが。

「小学校の担任では駄目なのですか」

「小学生の担当は後藤先生なんです」

後藤、お前か。私のポジションに石の如く居座っているのは。

「はぁ、わかりましたよ。中学生は何名いるんですか」

私が諦め、やる気のない表情でそう聞くと、白髪の男はにこりと笑った。そして答える。

「中学生は６０名。３年生の人数が４３名なので２クラスあります。秋環先生には２組をお願いします」

「はいはい」

もうどうにでもなれ。私が返事を返すと、白髪の男は女の先生に言う。

「五十嵐先生、秋環先生を寮まで案内してさしあげて」

「え、あ、はい」

女の先生――五十嵐先生は嫌そうな顔で返事をした。私はその様子を見ながら、後藤先生の持っていた私の荷物をそっと奪い返す。後藤先生は眉を潜めて、静かな声で言った。

「態度の悪い大人ですね。子供たちに影響しなければいいのですが」
「ここの子供たちが頭の固い、つまらない人にならなければいいけど」
後藤先生は私を睨みつけていた。

私の部屋は先生方の住む寮の中で、一番端っこの暗い場所にあった。五十嵐先生はおずおずと廊下を歩きながら、無言で私を案内する。私も何もしゃべらなかった。
私の部屋の前に着くと、五十嵐先生は急に顔を上げ、そして私に言った。
「秋環先生は強そうな人ですよね」
「え？あぁ、よく言われるわ」
「私、五十嵐優（いがらしゆう）って言います。これからよろしくお願いします」
「よろしく」

私のことが気に食わないと思っていたのだが、私を案内するのが嫌だった理由がわかった。五十嵐先生はこの不気味な雰囲気が苦手なのだ。なんだか古びた廊下に、私の部屋はその廊下の中でも暗すぎる。
五十嵐先生は細かく体を震わしながら、私を見ていた。困ったもんだ。

「あの、部屋まで送りましょうか」

「い、いえ！平気です！」

「いや、いいです。送ります。ちょっと待っててください」

私は仕方なしにそう言いながら、部屋の扉を開けた。キィイと錆びた音が響きドアが開くと、私の視界は一瞬真っ白になった。

「え？何」

私がつぶやくと、白い世界は新しい綺麗な部屋に変わる。そこには一人の女の人と白いカーテン、そしてたくさんのぬいぐるみがあった。女の人はとても幸せそうに笑っており、私を見ている。ときおり私にぬいぐるみを持ってきては何かを言うが、音が全くなかった。私はしゃべることができずにただそれを見ている。

「秋環さん？」

暖かい手が私の背中を触り、私のその光景は吸い込まれるように消えた。

なんだったのだ、今のは。数分間ボーっと前を見ていたが、考えてみてもわからない。今は古びた暗い部屋が広がっていた。

「今の見た？」

「え？何かいたんですか！？」

不安で顔が真っ黒になる五十嵐先生を見て、私はこの話をするのを止める。その辺に荷物を置いて、五十嵐先生を送ることにした。

そのことを考えるのは、また後でいいか。

第二章　神田光

朝の光と冷たい空気が、私の健やかな眠りを起こした。重い体を横に向け、隣に置いてある携帯を手に取り時間を確認する。時間は８時だった。

「あ・・・・・・」

明らか遅刻の時間を確認してから、後藤先生から私の携帯に電話が鳴った。何故、彼が私の携帯の番号を知っているのかという疑問は後としてその電話に出る。

「はい」

「はい、じゃないでしょう。まさか今起きたんですか」

「いやぁ・・・・・・、すぐ行きます」

すぐに電話を切り、私は重い体を起こす。部屋は夜とは違い、とても明るかった。私は急いで寝癖を水で直すと、顔を洗って化粧をする。その際、前日の夜に見た光景のことを思い出した。

なんだったのだろうか、あの光景は。五十嵐先生は見えていなかった様子だった。なぜ私だけあんな光景が見えたのだろう。あの女の人は誰なのだろうか。何故私に笑顔を向け、ぬいぐるみを持ってきていたのだろうか。夜にそんなことを考え、いつの間にか寝てしまったのか。

今は深く考えている時間もなく、さっきから何度も後藤先生から着信がきている。全く、女はいろいろ支度があるということを知ら

ないのか、あの男は。まぁ、何はともあれ、寝坊した私が悪いのだが。

私は寮から猛ダッシュで学校まで走る。今日はヒールを履かずにスニーカーを履いていき、とても走りやすかった。学校のチャイムが鳴り響く。それと同時に私は職員室に飛び込んだ。

「おはようございます」

その場にいた全員が私を見る。後藤先生だけが目を吊り上げて、隣で小声で怒鳴る。

「おはようございますじゃないだろう！今何時だと思ってんだ！」

「はぁ、すみません」

白髪の男はそんな様子を見て、何からおかしそうに笑った。五十嵐先生に聞いたのだが、彼はこの学校の教頭らしい。名前は安田四郎。

「いやいや、おもしろい先生が来てくださってなによりですなぁ」

嫌味なのか、本気なのか、よくわからないが特別怒っているわけでもないらしい。私も遅刻なんて初めてなのだが。そんな安田教頭の様子に飽きれたかのように、後藤先生は深いため息をついた。そして私に薄っぺらい紙を手渡す。

「これがお前のクラスの名簿だ。まとめといたからよく読んでおけ」

「あざぁっす」

軽い返事に後藤先生は眉毛をぴくっと動かしながら、職員室を出て行った。すると五十嵐先生が私に近づき、教室まで一緒に行こうと誘ってきた。

「いいですよ」

私は迷うと困るので一緒に向かうことにした。

「秋環先生はまだ1クラスですけど、そのうち3年生は全員先生の担当になるかもしれないですね」

「そ、れは嫌かなぁ・・・・・・。あの頭でっかちな後藤先生にやらせればいいのに」

本当に冗談じゃない。中学生は何を仕出かすかわかったもんじゃないし、力もそれなりにある時期だ。対応に困る。

「後藤先生にあんな態度取れるのは秋環先生が初めてですよ」

「そうなの？」

私のその五十嵐先生の言葉に、ひとつの何気ない疑問が浮かんだ。

「そういえば、ここの学校ってずっと4人だけだったの？私以外に飛ばされてくる人って」

「・・・・・・4人だけでしたよ」

五十嵐先生はそう言った。私は少しあった沈黙に、その答えは嘘だと判断する。しかし何故嘘をつくのか、もしかすると前に何かあったのかもしれない。

「何かあったんだ？」

単刀直入に聞いてみる。すぐに五十嵐先生の表情が先日のように崩れるかと予想していた。しかし実際そうではなかった。

「ないですよ」

五十嵐先生は作り笑顔を見せ、そう答えた。なんだか寒気を感じる。気温が低いのもあるだろうが、五十嵐先生の作り笑顔になんだか恐怖を感じた。

3年2組の教室につき、私は五十嵐先生に一言お礼を言ってそのドアを開ける。

この学校にきて緊張しているのか、私はなんだか恐怖を覚えることが多いようだ。ドアを開けた瞬間、神田光の視線と私の視線が合い、私は思わず息を呑む。ほとんど無意識だ。

「えーっと、このクラスの新しい担任になりました。秋環里美といいます。前は小学校の先生だったんでわからないことだらけかもしれないけど、どうぞよろしく」

私のやる気のない挨拶に、生徒たちはくすくすと笑っていた。まぁ、和やかな雰囲気のクラスで何よりである。その中で神田だけが、口元だけを笑わせて私を見ていた。成績優秀の子というのはそういうものなのだろうか。

「とりあえずまだみんなの名前わかんないんで、自己紹介でもして

もらおうかな」

「えぇー！そりゃないよ！」

生徒たちが文句言う中、神田だけはやはり微動だにせず私を見る。瞬きもせずにひたすら私を見る神田はなんだかとても不気味な存在であった。

「冗談、そんな暇はないんでね。後藤先生に渡されたプリント回します」

和やかな雰囲気のまま、1時間目は終わった。休み時間の際、私の元に女子生徒が数人やってきた。都会からやってきた私が珍しいらしく、いろいろ話を聞きたいようだ。ついでだったので、私は神田のことについて聞いてみることにした。

「あのさ、神田さんってどういう子かな？」

「神田さん？神田さんはとてもいい人ですよ」

「へぇ、いい子なんだ」

私がそう返すと、女子生徒はにっこりと笑って大きく頷いた。

「クラスの中心になって声を上げてくれるし、成績もいいしね」

「へぇ、私から見たらそうは見えないけど」

うっかり本音が出てしまったが、女子生徒は気にしていないようだ。心の豊かな子たちである。一人が困ったかのような顔で私に言

った。

「神田さん、新しい先生が来るといつも黙っちゃうんです。なんでかはわからないんですけど」

「人見知りとか？」

「うーん・・・・・・」

唸ってしまうその生徒に私は小さく笑う。そこまで真剣に考えてもらっても困るからだ。しかし神田はよくわからない子だということはわかった。奇妙な表現だが、それが正しいのである。

私の中にある雲は余計に濃さを増したような気もするが、そんなことでいちいち悩んでいたら教師としてやっていけない。また後回しにするしかないのか。

授業が終わり、書類をまとめるため職員室の自分の机に向かってから何時間か経過した。気がついたときには外はもうすでに真っ暗で、学校の先生というよりもＯＬの気分だ。中学３年生がこんなにめんどくさいものだとは思っていなかった。正直なめていた。

私が思いっきり背伸びをすると、職員室のドアが喧しい音を立てて開く。入ってきたのは後藤先生だった。後藤先生は私を見るとすぐに目を離し、自分の席まで歩いていく。その悪意のある態度に対しては特に何も感じなかったが、質問するにはなんだか気まずい空気だとは思った。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

「・・・・・・わからないことがあるんで質問していいですか」

「なんですか」

私のその前置きに、後藤先生は無表情で聞き返した。もちろん、顔は机の書類に向いている。

「私の前に来た先生についてなんですが」

「ほぉ」

後藤先生の表情は変わらない。

「五十嵐先生に聞いてみたんですが、私以外飛ばされてきた先生はいないって言うんですよ。でも今日生徒が『新しい先生がくるといつも』と口にしていたんで、私の前にも誰か『新しい先生』がいたんですよね？」

「・・・・・・ええ、いましたよ」

短い返事だ。

「なんで五十嵐先生は嘘をついたんですか？何かあったんじゃないんですか」

後藤先生は無表情で黙ってしまう。何かあったことはもうすでに確信した。それはそんなにまずいことなのか。

「それが気になって眠れないんですよねぇ」

「・・・・・生徒たちには言わないと誓えるか」

重たい口調でそう言う後藤先生。私はゆっくりと頷いた。

「秋環先生の前の教師は、２年前に死んだ。いや」

死、という文字。覚悟はしていたがこんなにも重々しく、心にのしかかる言葉は初めてかもしれない。後藤先生は無表情で続けた。

「殺されたんだ」

「殺された・・・・・・ですか」

「遺体は焼却炉の中で丸焼けの状態で発見された。顔も性別もわからないくらいに焼けていた」

「・・・・・なんで殺されたって思うんですか」

私のその質問に、後藤先生は眉間に眉を寄せる。その表情で私は理解した。

「死体を発見したのは私だからだ」

思い出すのを拒むようなその表情。黙って聞くしかない。

新しい教師が来て１週間くらい経ったと思う。私が朝のホームルームを終え、職員室に戻る途中だ。異常に真っ黒い煙が焼却炉の方

から、もくもくと上がっていたのを見つけた。煙の高さも黒さもおかしいと判断した私は火事だと思い、急いで焼却炉の方に走った。焼却炉に近づくにつれて、変な鼻につくような臭いがしてきた。それは吐き気がするくらいの腐臭で、途中から口と鼻を手で押さえながら走っていた。

焼却炉の近くまできて、火事ではないことに安心したが、煙と臭いは焼却炉の中から出ていることを確認する。私は焼却炉の中に、誰かが悪戯で悪臭を放つものでもいれたのかと思い、覗いてみたんだ。始めに私の目に映ったのが人の形をした赤黒い物体で、それが腐臭を放っていた。とっさに理解した。『人間が焼かれている』と。燃え盛る火の中に何も考えず手を突っ込み、私はその人間らしきものを慌てて引っ張り出した。肌は爛れ、顔がわからないし、目も焼けてしまっていた。しかしまだその教師は生きていた。

もう動かない体だったが、口が微かに動いており、私に何か言おうとしていたんだ。だから私は大声で怒鳴るように聞いた。

「何があった!?」

するとその教師はもごもごと口を動かして、確かに私に言った。

「誰かに押された」

確かにそう言ったんだ。

話し終えると後藤先生は大きなため息をつく。

「そんなことが・・・・・・」

予想はいていたが、ここまで生々しく話されると背筋がゾッとする。しかも後藤先生の手の中でその教師が亡くなったとなると、さすがに私も心が痛む。

「犯人は捕まったんですか？」

「いいや」

しかも犯人は捕まっていないと言う。しかし第二の事件は起こっていないのだから、そんなに心配することもないのであろうか。

「生徒たちに言うなよ。不安にさせるだけだからな」

「はいはい。言えませんよ、そんなこと」

これで私の奇妙な思いが消えたのか。いいや、消えない。事件のことはわかったが、それは幾つかある突っかかる何かの中の一つでしかないのだ。

私はふと思い出し、職員室を出る前に後藤先生にもう一つ質問してみた。

「神田さんっているじゃないですか？」

「・・・・・・・・・」

「私なんかあの子に嫌われてるみたいで、ずっと私のこと睨んでるんですよ、笑顔で」

私のその言葉に後藤先生はさっきまでの表情とは異なり、何やら口元に笑みを浮かべる。そして私の方を見て言った。

「笑顔で睨む、そんな表現はおかしいんじゃないですか」

「おかしくないですよ。そのままなんですから」

なんだ、この空気は。後藤先生は神田という名前が出てきた途端、態度がコロッと変わった。そんなに気に入っているのか、神田を。

「同級生によれば前の、その亡くなった教師にも同じような態度だったらしいです。なんか気味悪いんですよね、あの子の笑顔」

「他人の顔を気味悪がるのは失礼ですよ。神田は成績優秀のいい子。前にもそう言いましたよね」

「そうですね」

私はもう聞くのを止めた。これ以上聞いても時間の無駄だと学習したからだ。

何故、神田について詳しく知っているような口ぶりなのに詳しく教えてくれないのだろうか。こうなれば本人と直接話しをしてみるしかないかな。

そもそも、どうして私はそんなに彼女のことが気になるのだろうか。驚かされたからか。それすらもわからない。

月の綺麗な夜道を歩き、私は自分の家へと帰る。まだこの田舎道には慣れそうにもなかった。

第三章　おくりもの

私が寮の廊下をのそのそと歩いていると、その足音を聞いた五十嵐先生が部屋から顔を覗かせて来た。スッピンでパジャマ姿の五十嵐先生は、私を見るなり笑顔で手を振る。もう寝ようとでもしていたのか。まだ8時になったばかりなのに。

「秋環先生！ちょっと来てください！」

「え？あ、はい」

とりあえず呼ばれてしまったので無視するわけにもいかず、私は五十嵐先生のところに向かった。一体なんの用なのだろうか。

「あの、さっき秋環先生宛てに宅配が来て・・・・・。私が預かっておいたんです」

「え？私に？」

「はい」

なんだろうか、一体。引越し祝いだったら、贈った人に殴りこみに行こう。

私がそんなことを思っていると、五十嵐先生は小さめのダンボール箱を持ってきた。そして私の顔を見ながら、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。

「男の方からですかぁ？秋環先生も隅に置けませんねぇ」

「は？そんなわけ・・・・・・」

私はそのダンボール箱に貼られた差出人名を確認する。そこには『多田亮（ただりょう）』と記されていた。

「え」

ゾッとするのを感じる。記憶の中にある元彼、教師たち、男友達の名前を思い出す。しかしこんな名前の人間は誰一人として思い浮かべなかった。

「彼氏さんからですか？」

五十嵐先生はそう茶化してくるが、私はちっとも笑えなかった。

「知らない、こんな名前の人」

「え？」

そう知らない。私は丁寧にガムテープを剥がし、中身を確認しようとした。五十嵐先生は呆然としたまま、その様子を隣で見る。

箱は何かがギチギチに詰められているようで、少し膨らんでいた。私が剥がすガムテープの音が、静かに部屋に響く。

「知らない人からって、なんだか怖いですね・・・・・・」

五十嵐先生はそう言ったが、声は楽しそうだった。まるで自分のプレゼントを開けていくみたいにワクワクしているのだろう。とても伝わってくる。

しかし私の心臓の音はその真逆の思いによって、破裂しそうだった。おかしい。ガムテープは箱に隙間ができないように、がっちりと貼られている。そして一番奇妙だったのが臭いだ。始めは微かだったのだが、ガムテープを少し剥がした瞬間吐き気のするような腐敗臭。

そしてその正体は私がガムテープを剥がし終わり、五十嵐先生の悲鳴と同時にわかった。

「誰が・・・・・・こんなことを・・・・・・」

ダンボールから放たれる悪臭。赤い液体とミンチ状態の肉片、そしてまだ生きている小鳥。それが中身だった。

ダンボールにぎっしりと入っていたのは、大量の小鳥とその死骸。血が染み出さないようにダンボールの内側にはビニール袋が貼られていた。

「と、とりあえず警察に・・・・・・」

私はそうつぶやき、ポケットから携帯を取り出す。すると五十嵐先生が慌ててそれを止めた。

「駄目！警察は嫌！」

私から携帯を奪い取ると、五十嵐先生は体を極度に震わせながら私を見る。意味がわからない。

「ちょっと！なんで！」

「ま、前の事件もあるし・・・・・・、また警察が来たら、村のみんなが・・・・・・不安にな、なります」

「はぁ？ふざけたこと言ってないで携帯返して」

五十嵐先生の手から携帯を奪い返そうとするが、彼女は手を離そうとしなかった。なんで私たちがこんなところで奪い合いをしているのか。訳がわからない。

「嫌！止めてください！」

「それはこっちの台詞だっての！わかったから携帯は返せよ！」

わかった、という言葉を大声で連呼し、やっと携帯を返してもらえた。しかしこれを私が処理しなくてはいけないのか。なんてことだ。

「たしかこの寮の裏に小さい山があったよね」

「は、はい」

「私、そこにこれ埋めてくるわ」

このどうしようもない悪臭と光景を、早くどうにかしたい。五十嵐先生は手伝ってくれるつもりはないらしく、私から少し離れていた。仕方がない、一人で行くしかないのか。それとも誰かに手伝ってもらうか。

少し考えたのち、後藤先生に電話をしてみる。番号を知っているのが後藤先生しかいなかったからだ。そういえばなんで後藤先生は私の電話番号を知っていたのだろうか。

数回のコールの後、「はい」という低い声が聞こえた。

「あ、こんばんわ。秋環です」
「わかっている。用件を話せ」
「今、寮に来てほしいんです」
説明は後回しだ。とにかく今はこの状態をどうにかしたい。
「理由は」
「理由は後でお話します。とにかく早く来てください」
後藤先生は少し黙る。数分経ってから「わかった」と言った。
電話を切り、五十嵐先生を見ると、彼女は怯えた表情で突っ立っていた。
「もうすぐ後藤先生が来るから、五十嵐先生は家の中にいてください。とりあえずこれは外に出します」
ダンボールを持ち上げようとしたが、私はすぐに手を離してしまった。ビニールの隙間から血が滲み出てしまっており、手に冷たい感触がしたからだ。気持ち悪いし、非常に腹が立った。一体誰がこんなことを。
気持ち悪がっていても仕方がないので、私は思い切ってダンボールを抱えて持ち上げる。クリーニングに出したばかりの服が、血によって赤黒く染まっていく。もうどうにでもなれ。
中身がこぼれ出ないようにそっと外まで運び、五十嵐先生が見守る中、部屋のドアを閉めた。あとは後藤先生の到着を待つだけである。外はひんやりとした風が吹いており、私の暑くなった頬を冷やしてくれる。空は都会では見られないような、満天の星が広がって

おり神秘的だった。
柄にも合わずにそんなことを思いながら、現実逃避をする。そうでもしないと、この怒りは後藤先生に向けられそうであったから。
外に出てから5分くらい経ち、ジャージ姿の後藤先生がやってきた。そして私の傍に置いてあるダンボールを見て、眉を潜める。

「なんだ、これは」

「わかりません。私宛に届いた郵便らしいですよ」

「差出人は」

「知らない人です」

後藤先生は深刻な顔をしてそれを見ていた。

「五十嵐先生が警察はめんどうだから止めてほしいと言うので、寮の裏にある山の中に埋めてこようと思いまして」

「それで私を呼んだのか」

「まぁ、はい」

断られる可能性もなくはなかったので少し心配したが、後藤先生は黙ってそのダンボールを抱えた。皺もない綺麗なジャージが、小鳥の血によって汚れていく。私はそれを黙って見ていた。後藤先生の後についていき、山の茂みの足を入れる。夜の山はひんやりとしており、不気味である。何か悔しいが後藤先生を呼んで正解であった。

「この辺でいいだろう」

私たちが足を止めた場所は、山に入って１０分ほど歩いたところであった。草木が行く手を阻むように生い茂り、しかも暗いので歩きにくい。危うく後藤先生を見失うところであった。

「あ、スコップ持ってくればよかった」

「持ってきてないのか」

また何か皮肉でも言われそうだったが、後藤先生は言わなかった。近くに落ちていた太い木の棒を使って地面を掘り始める。気を使っているのだろう。悪質すぎるこの悪戯。私だって恐怖は感じる。

ふと、私は後藤先生から目を離し、辺りを見渡してみた。その瞬間、すべての音が消える。風の音も自らの足音も後藤先生の土を掘る音もなくなった。この感じは前にもある。

私はこの森の中を走っていた。視界が上下に激しく揺れ、とにかく森の中を走っている。しかしはっきりと周りが見えなかった。視界がぼやけて霞んでいる。よく見えない。

「どこへいくの」

声は出ない。でも私は言う。じゃないとなんだか怖かった。私の向かっている先はとても薄暗い森の中で、音もない場所。

「どこへいくの」

何度も何度も聞いてみる。だけど誰も答えてなんかくれなかった。

私の視界に後藤先生が映ったとき、彼は私の顔をしかめっ面で覗きこんでいた。その顔があまりにも近かったので思わず叫ぶ。

「なんですか！」

「こっちの台詞だ！いきなり大声出すんじゃない！」

「びっくりしたんだから仕方ないじゃない！」

「驚いたのは私の方だ！一人で何やらぶつぶつ言っているから近くに寄ってみれば」

「私がぶつぶつ何か言ってたんですか？」

それはたぶん声の出なかった言葉だろう。まったく、よくわからない。あれは幻覚なのだろうか。別に薬などやっていないというのに。

後藤先生のしかめっ面はダンボールを埋めて、そこから離れていくまでそのままだった。私はその山を降りる途中、大きな池を見つけた。それは夜のせいか、異常なまでに真っ黒でとても深いことがよくわかる。でもあまり気にしなかった。

私たちが山を降りた頃には、とっぷりと時間が経っていた。後藤先生は血だらけになったジャージを手で払うと、私の方を見て言う。

「あまり気にしないことだな。今日はゆっくり休め」

私を気遣ってくれているのか。たまには優しい。

「ありがとうございます。でも私は全然大丈夫です。おやすみなさい」

「そうか、おやすみ」

なんだか、極度に疲れた。精神的にも身体的にも疲れているのだ。だからあんな幻覚も見るのかもしれない。しかし、私に嫌がらせなんかする人間は一体誰なのだ。

深いことを考えるべきなのか、それとも考えるのを止めるべきなのか。私の心臓は破裂しそうなくらい鳴っている。この鼓動は恐怖であろう。平気なんかではない。私だって怖いと感じる。

「明日は早く起きなくちゃ」

私は明日考えるという選択肢を選んで、電気を消した。

第四章　恐怖

「先生？どうかしたんですか？」

誰かがそう話しかけてきた。その声でふと我に返り、声の主の方に顔を向ける。そこには神田が心配そうな顔で私を見ていた。神田が話しかけてきたことにまず驚いたが、それはそんなに大きなものでもなかった。

「あ、いや、考え事しててね」

「何か悩みでもあるんですか？」

神田はそう聞いてくる。この学校に来てから約3日、今まで一度も話しかけてこなかった彼女が今日はやたら近寄ってくる。今朝も一番に挨拶をしてきたのは彼女であった。

「悩みっていうか、疑問だな」

この学校は疑問が多すぎる。いちいち考えてしまう私もどうかしているとは思うが。

「何か私にお手伝いができれば言ってくださいね」

「じゃあ一つ目の疑問」

いちいち遠まわしに物事を考えるのも好きではない。

「なんで今日はそんなに話しかけてくるの」

神田は顔色一つ変えず、笑顔で答えた。

「すみません。私人見知りで・・・・・。先生に何度も声をかけたかったのですが、なかなかできなくて」

「へぇ」

そういうことなら筋が通らなくもないが、なんとなく納得は出来なかった。しかしこれ以上の質問は特にない。神田を知りたい気持ちはあるが、深入りしてもいいのかどうか迷う。

「もうすぐチャイム鳴るから席着きなさい」

先生らしいことを言ってみると、神田は「はい」と笑顔で聞き入れ、自分の席までゆっくりと戻っていった。彼女が席に戻っても、私は無意識に視線を離さず彼女を見る。まさかとは思うが、私は彼女を少なからず恐れていた。どうしてかはわからない。

また疑問が一つ増える。しかも解決策すら浮かばない疑問ばかりである。

昨夜の悪質な悪戯は警察に届けてしまえば簡単なのだろうが、この村には事件がある。五十嵐先生が嫌がるので、あの少ない人数の職場に気まずい空気を持ち込むのだけは避けたかった。しかし犯人が見つかっていないとみると、警察はまだこの村を調査しているのではないのだろうか。

頭だけを働かせてみても答えは現れない。

昼休み、私は一人で昼食を素早く取り、すぐに職員室を出る。事件のあったという焼却炉に行くためだ。

「あ、秋環先生！」

早足で渡り廊下を歩いていた私に、神田が声をかけてきた。仕方なく立ち止まり、神田の方を見る。神田は外に出ている広い渡り廊下のベンチに座って、一人でお弁当を食べていた。

「何か用！？」

少し離れていたので大きめの声でそう返すと、神田はにこりと笑顔を向けてくる。

「どこへ行くんですか？そんなに急いで」

「焼却炉にちょっと用があってね」

嘘をつくつもりもないので、私はそう返した。すると神田は以前見せた、気味の悪い笑みを私に向ける。どこか悪意のあるその笑みは、やはり恐怖を感じた。

私は神田から目を離し、急いで焼却炉の方に向かう。一度振り向いてみると、神田はまだ私をジッと見ていた。あの笑みを浮かべたまま。

長い廊下を歩き、広い校舎を通り抜け、やっと焼却炉のあるゴミ捨て場に辿りつく。焼却炉は私のいる職員室とは真逆の場所にあった。とても遠い。ここまで来るのに早足で15分ほどかかってしま

った。
私はとりあえず焼却炉の方に近寄ってみる。するとまたあの真っ白い光が私を包み込んだ。
私の目にはあの女の人が映った。女の人はとてもとても悲しい表情を浮かべており、それとともに深い憎しみで歪んでいた。その顔で私を見ると、女の人は歩く。ゆっくりとした足取りで歩き、次に私の目に映ったのは燃え盛る焼却炉の中だった。女の人はその焼却炉に私を近づけると何かを怒鳴る。無音の世界なのでなんて言っているのかはわからなかったが、恐ろしい顔で真っ赤な口を大きく開けているのはわかる。
火傷しそうなくらい焼却炉に私を近づけて、そして女の人は手を止めた。もしこれが幻覚でなければ物凄く熱いだろう。火傷をしているかもしれない。手を止めた女の人は唇を震わせ、私をジッと見る。泣く私をジッと見て、女の人は大粒の涙を私の頬に落とした。そしてその場に座り込み、子供のように泣きじゃくる。

「どうして泣くの？」

無意識に思う。しかししゃべれない。彼女は泣き続けた。
喧しいチャイムの音が私の耳に鳴り響く。その音で私はふと目を覚ました。目の前には真っ黒の使われていない焼却炉があり、私はそれを見る。幻覚の中にあった焼却炉と全く同じであった。
あれは本当に幻覚なのだろうか。私は自分の両目から流れ落ちる涙を感じ、そう思う。幻覚じゃないとしたら一体なんだと言うのだ。女の人は一体誰なのだろうか。私には検討もつかない。

学校の授業が終わり、ホームルームも済ませ、私は教室を後にする。するとやはり神田がすぐに私に声をかけてきた。

「先生」

まったく、本当に今日はよく絡んでくるな。

「何？」

私がそう言いながら振り向くと、神田はにこにこしながら意味深に小さな声で言う。

「何かありましたか？」

「は？」

「焼却炉、行ったんでしょ？」

何が言いたいのか、一瞬わからなかった。彼女は事件について知っているのか。まぁ知っていても不思議ではないが、言い方が不気味である。

「あぁ、何もなかったよ。残念」

無表情でそう返してみる。いや、彼女の前だと作り笑いすら出来ない。すると神田の顔から笑みがしゅんと消え、一言言い残した。

「うそつき」

今まで聞いたことのないような低い声で、神田は私を睨みつめる。その表情に見覚えがあった。あの女の人だ。あの女の人が私に向けていた憎しみの顔にそっくりなのだ。

私と神田の間に沈黙の時間が流れる。しかしそれは、私を呼びに

来た五十嵐先生によってすぐに遮られた。神田も笑顔に戻し、私に背中を向ける。このときだけ、私は五十嵐先生に感謝をした。

この時期の夕暮れはすぐに日が沈むので嫌になる。１８時にはすでに真っ暗だ。私はそんなことを思いながら、帰り道を一人で歩いている。五十嵐先生に帰りを誘われたが、私は首を横に振って断った。

田舎の道は電灯の灯りが少なく、とても静かで嫌いではない。しかしこの数日間のさまざまな出来事のお陰で、この何もない道にすら恐怖を感じた。いつの間にか私はとても臆病者になってしまったのか。嫌な気分だ。

それにしても、今日の神田の態度は一体なんだったのか。しかも昨日あんなことのあった後だ。もしかしてあの嫌がらせも彼女の仕業なのか・・・・・・。いや、違う。

「あれは彼女じゃない」

そうつぶやいてみると、妙に納得出来た。単なる自己満足なのだが、それが正しいと思える。あの犯人の目星はだいたいわかっているのだが、そうなるとこの村の住民は少しおかしいのかもしれない。それは考えすぎか。

しかし神田は私を嫌っている。その理由がさっぱりわからない。もしかして顔が気に入らないとかなのだろうか。それとも・・・・・・、例の事件に関連しているとか。

全く困ったものだ。辺ぴな村の上、教師は嘘つきで・・・・・・。そういえば神田は今日、あの焼却炉で何もなかったと言った私に嘘つきだと言ったな。確かに私は嘘をついたが、どうして嘘だとわかった。私の顔に出ていたというのか。それだとしたら、私の演技も少しは磨かなくてはならないのだが。

考えても考えても、出てくるのは疑問ばかりでさっぱり先に進めない。わかったことは結局、昨日の犯人だけ。しかも何で私にそんな嫌がらせをしたのか、見当もつかない。なんなのだ、まったく。

「せーんせいっ」

「うわ！」

突然後ろから声をかけられ、うっかり情けない声を出してしまった。反射的に後ろを振り向き、声の主が神田とわかると更にびっくりする。神田はにこにことといつもどおりに笑っていた。

「か、神田か。びっくりさせないでよ、もう」

「あはははは。驚きすぎですよー」

その笑顔の下、一体いくつの仮面を持っているのだろう。この子は。

「何の用？」

「あー、続きですよ。つ・づ・き」

続きというのは、ホームルームのあの話のことだと、私は一瞬にして変わった神田の表情によって察知した。しかしいつまでも生徒にびびっているのでは、教師としての面目丸つぶれだ。

「続きって何のこと？焼却炉についての話なら、何にもなかったって言ったよね？」

「嘘つかなくてもいいですよ。どうして嘘つくんですか？」

「どうして嘘だと思うの？」

出来るだけ平然とした態度で私はそう聞き返した。すると彼女はさっきの笑みとはまた別の、奇怪な笑い声を立てて笑みを見せた。

「だって、私にも見えるんです」

「見える？」

彼女はこくりと頷いて、そして小さな声でボソボソと言った。

「お前が見たのは幻覚なんかじゃない」

私はその瞬間、足が鉛のように重くなるのを感じた。まるで金縛りにされたかのように体が動かない。彼女は私を睨みつけ、私は彼女を見る。

彼女は私が時折見ているものを知っていた。あれが何なのかも知っている。しかし聞いていいのだろうか。私はあれをあまり深く考えていなかった。不思議と考えるという選択肢が浮かばなかったからだ。それが何故だかはわからない。

別に知りたくなんかない。知ってはいけないような気さえするのだ。私は彼女を睨みつけ、そして静かに言い放った。

「そうね、私は幻覚なんか見ない。でもあれが何なのか、どうしても考える気になれないの。だからとりあえず」

ゆっくりとゆっくりと神田に近づき、私は出来る限りの力で彼女の左頬を平手で叩いた。彼女は後ろに仰け反り、そして尻餅をつく。

私は驚いたように目を見開く神田に、上から怒鳴りつけた。

「教師に向かってなんだよ！てめぇは！あ？なめんじゃねぇよ！！お前が何を知っているとか、私に何の恨みがあるのかは知らないけど、私はなんで赤の他人であるお前なんかに頭悩ませなければならねぇんだよ！成績がいいとかそんなの関係ないからな！私は精神の腐ったてめぇみてぇな餓鬼が、一番嫌いなんだよ！」

そう、この方が私らしい。たとえこれで訴えられたりしても、私は別に教師を辞めたっていい。こんなところに放り出されるくらいなら、私は教師なんて辞めてやる。

神田はまん丸と目を見開いたまま私を見ていたが、数秒でその表情は怒りに変わった。しかし私はもう怖いと感じることはなかった。そうだ。そもそも生徒に怯えること自体が私らしくないのだ。暴力を振るってしまったのは少し罪悪感を感じたが、なんだかほんの少しだけすっきりした。

私が上から神田を見ていると、彼女はまたボソボソと口を動かして言う。

「そうやってまた私を傷つけるのね」

「はぁ？」

意味不明な言葉に私は気の抜けたような声を漏らしてしまう。神田はさっと立ち上がり、私の脇を通り抜けて、走って行ってしまった。

彼女は被害妄想癖でもあるのかもしれない。それで私にあんな顔を？

また無駄な謎が増えてしまったが、少しはすっきりしたので大丈夫だ。彼女の言動と行動には何かあるのだろう。神田のことについ

て、もう少し詳しく調べる必要がありそうだ。

第五章　一つの答え

休日、私は村の方に行ってみることにした。この村に来て、学校以外の場所にまだ行っていなかったし、神田のことを調べるためでもある。昼少し過ぎくらいまで寝て、それから私は寮を後にした。

村は昼でもとても静かだ。時々、畑を耕しているおじいさんが私に「こんにちは」と挨拶をしてくる。あとは微かに吹く風の音と、それによって靡く木の音ぐらいであった。

私は神田の家の側までやってきた。近所の人に神田について聞いてみようかと思ったのだが、近所の人などいなかった。神田の家の周りに家はなく、ただ畑が広がっているだけである。人口の少ないこの村では仕方のないことではあるが、いきなり困ったことになってしまった。

しかしそう考えると狭い村の中なので、逆に神田を知らない人はいないのではないだろうか。私もよそ者なので、いろんな人に声をかけられる。私は神田の家から少し離れた場所にある、農家の家を訪問することにした。

インターホンがないので、私はドアを軽く3回ほど叩く。「はぁい」という優しい声と足音が中から聞こえてきた。ゆっくりとドアが開くと、腰の曲がった老婆が私を見る。そしてにっこりと笑って見せた。

「おやぁ、珍しいお客さんですねぇ。どうなさったのですか？」

「突然訪問して申し訳ありません。神田さんをご存知ですか？」

「神田さんかい？よぉく知ってるわよ。さぁ中にお入りなさい」

「あ、いえ、そういうわけには・・・・・・」

この開放的なものはなんなのか。見知らぬ人を家に勝手にあげるなど、危険極まりないのに。

一瞬そう思ったが、ここは都会の町ではないことを思い出した。

「いいのよ。どうぞどうぞ」

ドアを大きく開いて私を誘う老婆を見て、私はお言葉に甘えることにする。家の中に入るとおいしそうな甘い匂いが漂ってきた。どうやら何かお菓子を焼いていたらしい。

「丁度クッキーを作ったのよ。誰かと食べようと思っていたからよかったわ」

老婆はそう言って私をリビングまで案内すると、すぐにキッチンに行く。そしてクッキーを布を敷いた籠の中に入れ、私の元に持ってくる。リビングのテーブルに置くと、私の向かいに座った。

「お話する相手ができてよかったわ」

「あ、その・・・・・・神田さんのことですが」

私は早速話しに乗り出す。

「神田さんね。神田さんはとってもいいご家族よ」

またそうきたか。私は大きなため息をついた。

「あの、その言葉はさんざん聞きました・・・・・・」

「ほほほ、そうでしょうね」

透き通った紅茶をティーカップに注ぎながら、老婆は笑う。やはりここでも同じ答えしか聞けないのか。そう思った私にカップを手渡しながら、老婆は更に口を開いた。

「では、こんな話はもう耳に入れましたか？」

「どんなお話ですか？」

いい香りのする紅茶をそっと啜りながら、私はそう聞き返す。すると老婆はどこか哀しげな顔で、小さな声で話し始めた。

昔々、この村に二人の若い夫婦がやってきました。夫婦はとても仲がよく、村人たちは歓迎して彼らを向かい入れました。やがて二人の間に可愛らしい女の子が生まれました。二人はとてもとても幸せで、毎日笑って暮らしていました。しかしある日突然、父親が家の中で自殺しているのが発見されました。発見したのはその妻でした。

妻はそのショックと絶望感で、まだ生まれて間もない赤ん坊に虐待をするようになってしまいました。殴ったり蹴ったり、赤ん坊は生きている間、それはもう苦しそうに泣き続けたそうです。

夫が死んでから数ヵ月後、妻は赤ん坊と一緒にどこかへ行ってしまいました。彼女の行方は今もまだ誰も知りません。

「聞いたことないですね。そんな話」

妙にリアルなその話し方に私は背筋がゾッとする。老婆は話し終えると、静かにこうつけたした。

「この話はね、本当はしてはいけない話なのよね。でも年を取ると誰かに話したくて仕方なくなってしまうのよ」

「は、はぁ。それで神田とどういう関係が・・・・・・」

村の伝説のようなその話。しかし私にそんな話を急にされても困る。老婆は笑いながら私に答えた。

「さぁ、なんでしょうね。神田さんを見ていると、その話をどうしても思い出してしまうのよ」

「そうなんですか・・・・・・。それって本当にあった話なんですか？」

「ええ、ありましたよ」

老婆はきょとんとした顔でそう答えた。私はそれに対して軽くため息をつきながら、お茶に口をつける。暖かい林檎の紅茶で程よい甘さがおいしい。

老婆はそんな私を見てまた微笑み、クッキーも勧めてきた。

しばらく老婆と話をしていたが、神田についてはそれっきりで結局よくわからずじまいに終わった。
私は村からバスで２０分くらいの場所にある小さな街に行く。村にはスーパーやコンビニがないので、ペンなどの文房具の買出しは、一度街に行く必要があった。私はしばらくぶりのウインドウショッピングを楽しみ、人通りの多い街を歩く。交差点ではたくさんの人間が互いに避けながら、前に進んでいく。私も同じだ。
私は交差点の真ん中を歩いていた。白と黒の地面が目に移り、たくさんの人間の足が見える。ふと、何か違和感を感じた。何故、私の目線がこんなに低いのか。人々が私を避け、私を上から見ながら通り過ぎていく。そして私の周りに人がいなくなったとき、信号が赤に変わった。私を交差点の真ん中に置き去りのまま、車が発進する。
ここは無音の世界。私の視界にあの女の人が映った。彼女は私を見て青ざめた顔をしており、必死に叫んでいる。その声は聞こえなかったが、周りの人間が一斉に何かを叫びだした。おそらく私に向かってくる車も耳障りな音を立てながらクラクションを鳴らし、急ブレーキをかけているのだろう。
向かってきた車は私を避け、他の車にぶつかりながら止まる。私は運良く無事であった。女の人が私の元に走ってきて、私を力強く抱きしめる。涙を流し、おそらくずっと謝っていた。
私が我に返ったのは、信号待ちの場所である。私はまだ信号を渡っていなかった。信号は赤で、車が勢いよく走り去っていく。
「またか・・・・・・」
一体、なんの映像なのか。あの女の人は誰なのか。さっぱり身に覚えがなかった。しかも日に日に見る内容が危険だ。あれは幻覚な

のであって、私自身が死ぬということはないとは思うが。そういえば神田は私がそんな映像を見ることを知っていた。何故だろう。
その後の買い物は全く楽しむことができなかった。神田のこと、幻覚のこと、そしてあの老婆の話が頭にこびりつき、勝手に考え始める。これは私の性格なのかもしれないが。

寮に戻り、私はすぐに学校に向かった。向かう道には数人の子供たちとすれ違った以外のことはなかった。私は職員室にある自分の机のパソコンを開く。そしてこの村について検索してみた。すると恐ろしいほどに村の事件についての記事がたくさん出てきた。ズラッと並んだ記事の中で一番わかりやすそうなものを開いてみる。そこには昼間の老婆が話した内容がダラダラと書かれていた。
私が画面に食いつくようにその記事を見ていると、職員室のドアが音をたてて開く。私は音を聞いて、ドアの方に顔を向けた。

「あ、あれ？秋環先生。いらしたんですか？」

入ってきたのは五十嵐先生だった。彼女は私を見て目を見開き、声を裏返しながらそう言う。私は「どうも」と言ってからパソコンの方に視線を戻した。
五十嵐先生は私のパソコンの画面に映る記事を見て、後ろから声をかけてくる。

「この村の事件のことですか？」

「え？あぁ、うん」

画面をスクロールしながら、私はそう返す。五十嵐先生の表情は

見えなかった。足音が少し遠のき、椅子を引く音が聞こえる。どうやら自分の席に座ったらしい。私が記事を読んでいる間、五十嵐先生は無言だった。書類をまとめているのか、ときどきものを書く音が聞こえる。

それにしてもこの村は、私が思っていた以上に物騒であった。記事には老婆が言ったとおりのことが書かれていた。が、去年の事件が全く出てこない。何故だろうと思いながら村についての記事を読んでいると、一番最後の一行に書かれてある言葉に気がついた。『この村で起こった事件は、村の住民によって隠されている』と。

あまりにも単純な書き方だったので一瞬意味がわからなくなったが、どうやらこの村で起こったさまざまな事件は村ぐるみで隠し通されているらしい。なんとも物騒である。しかもこの一行はほかの人が書いた記事にも必ず記されていた。

「物騒な村なんですねぇ」

私がそうつぶやくと、五十嵐先生は無言のまま作業を続けていた。調べたいことが済んだので、私は椅子から立ち上がり、そのまま職員室を出ようとドアを開ける。

「あぁ、そういえば」

一つ、五十嵐先生に言おうと思っていたことを思い出し、私は足を止めた。そして五十嵐先生の方を見ながら、ゆっくりした口調で言った。

「あんた、顔に似合わず残酷なことできるんですね。軽蔑します」

五十嵐先生は顔色を一瞬で真っ青にし、自分の唇を強く噛む。私はそれだけ言ってから、職員室を後にした。

初めから怪しいとは思っていた。しかし彼女の上辺の性格的には、まさか鳥の雛を集めてミンチになるまでこなごなに磨り潰すことが出来るような、そんな人には見えなかった。というか、こんな小さな村でそんなことをしたら、必ず誰かに見られ、すぐに噂が広がるものだろうと思っていた。だが違う。

この村はそもそもがおかしいのである。どうやら私自身がこの村から歓迎されていないようだ。

五十嵐先生は自分が怪しまれないように、ダンボールの内側にビニール袋を貼り付け、血が漏れないようにしていたが、あんな無作法な貼り方で血が収まるわけはなく、案の定しばらく経ったら血が染み出てしまった。あんなものを配達なんてしたらすぐにバレるに決まっている。たぶん私が寮に帰る数分前までダンボールの中に磨り潰した雛鳥たちを詰めていたのであろう。しかも普段の服を着たまま、顔に血がついてしまうほど夢中になりながら。そして急いで服を着替え顔を洗い、私の足音を聞いて慌てて玄関から顔を出したのである。私が警察に通報するのを必死に止めたのも、調べればすぐにわかることだったからだ。そんな荷物を送った履歴はないのだから。

五十嵐先生が何故そんなことをしたのかはわからない。だけれどもどうやら私は、とんでもない村に送り込まれてしまったようである。もしかしたら、これは偶然ではないのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1905k/

うまれかわり

2010年10月11日12時10分発行